

上をとり、原子吸光度法（電気加熱方式）の標準添加法により次の条件で試験を行う。ただし、標準溶液は鉛標準液適量を正確に量り、水を加えて調製する。また硝酸 10.0 mL をとり、水を加えて正確に 100 mL とした溶液を用いて空試験を行い、補正する（0.5 ppm 以下）。

ランプ：鉛中空陰極ランプ

波長：283.3 nm

乾燥温度：110 °C

灰化温度：600 °C

原子化温度：2100 °C

（５）転化糖 確認試験（２）の試料溶液 5 mL を長さ約 150 mm、直径約 16 mm の試験管にとり、これに水 5 mL、1 mol/L 水酸化ナトリウム液 1.0 mL 及びメチレンブルー試液 1.0 mL を加えて振り混ぜ、水浴中で正確に 2 分間加温した後、水浴中から取り出し、直ちに観察するとき、液の青色は完全には消えない（0.04 %）。ただし、空気との接触面の青色は無視する。

電気伝導率

（i）塩化カリウム標準液 塩化カリウムを粉末とし、500 ～ 600 °C で 4 時間乾燥し、新たに蒸留して製した（二酸化炭素を含まない）電気伝導率 $2 \mu\text{S} \cdot \text{cm}^{-1}$ 以下の水に溶かして 1000.0 g 中に塩化カリウムをそれぞれ 0.7455 g、0.0746 g 及び 0.0149 g を含む 3 種類の塩化カリウム標準液を調製する。これらの液の 20 °C における電気伝導率は次表のとおりである。

標準液の種類 (g/1000.0 g)	電気伝導率 ($\mu\text{S} \cdot \text{cm}^{-1}$)	抵抗率 ($\Omega \cdot \text{cm}$)
0.7455	1330	752
0.0746	133.0	7519
0.0149	26.6	37594

（ii）装置 電気伝導率計を用いる。電気伝導率の測定は、溶液に浸された測定器具（セル）の電極間の柱液体の電気抵抗を測定することによってなされる。この装置には電極の分極による影響を除去するための交流が供給される。また、通例、温度補償回路が組み入れられている。セルには、白金黒でコーティングされた二つの平行に置かれた白金電極が備わり、一般に両極は、溶液と電極間で電解質が容易に交換できるガラス管で保護されている。セル定数が $0.01 \sim 1 \text{ cm}^{-1}$ のセルを用いる。

（iii）操作法 塩化カリウム標準液は測定に適したものを調製して使用する。セルをよく水で洗い、次に塩化カリウム標準液で 2 ～ 3 回洗った後、塩化カリウム標準液をセルに満たす。塩化カリウム標準液を $20 \pm 0.1 \text{ }^{\circ}\text{C}$ に保ち、電気伝導度を測定する。これを繰返し、測定値が $\pm 3 \%$ 以内で一致したときの電気伝導度 $G\chi_0$ (μS) を求める。測定した値から次式によりセル定数 J を求める。

$$J = \frac{\chi_{\text{KCl}}}{G\chi_0}$$

J ：セル定数 (cm^{-1})

χ_{KCl} ：塩化カリウム標準液の電気伝導率 ($\mu\text{S} \cdot \text{cm}^{-1}$) (20 °C)

$G\chi_0$ ：測定した電気伝導度 (μS)

本品 31.3 g を新たに蒸留して製した（二酸化炭素を含まない）水に溶かして正確に 100 mL とし、試料溶液とす

る。セルをよく水で洗い、次に試料溶液で 2 ～ 3 回洗った後、試料溶液をセルに満たす。マグネチックスターラーでゆるやかにかき混ぜながら、試料溶液を $20 \pm 0.1 \text{ }^{\circ}\text{C}$ に保ち、電気伝導度 G_T (μS) を測定する。同様に試料溶液の調製に用いた水の電気伝導度 G_0 (μS) を測定し、次式によりそれぞれの電気伝導率 χ_T ($\mu\text{S} \cdot \text{cm}^{-1}$) 及び χ_0 ($\mu\text{S} \cdot \text{cm}^{-1}$) を求める。

$$\chi_T (\mu\text{S} \cdot \text{cm}^{-1}) = JG_T$$

$$\chi_0 (\mu\text{S} \cdot \text{cm}^{-1}) = JG_0$$

次式により試料溶液の補正された電気伝導率 χ_c を求めるとき、 χ_c は $35 \mu\text{S} \cdot \text{cm}^{-1}$ 以下である。

$$\chi_c (\mu\text{S} \cdot \text{cm}^{-1}) = \chi_T - 0.35 \chi_0$$

乾燥減量 0.1 % 以下 (2 g, 105 °C, 3 時間)。

デキストリン 大容量輸液の調製に用いるものは、確認試験（２）の試料溶液 2 mL に水 8 mL、希塩酸 0.05 mL 及びヨウ素試液 0.05 mL を加えるとき、液の黄色は消えない。エンドトキシン 0.25 EU/mg 未満。ただし、大容量輸液の調製に用いるもの。

貯法 容器 密閉容器。

バクモンドウ

Ophiopogon Tuber

OPHIPOGONIS TUBER

麦門冬

本品はジャノヒゲ *Ophiopogon japonicus* Ker-Gawler (*Liliaceae*) の根の膨大部である。

性状 本品は紡錘形を呈し、長さ 1 ～ 2.5 cm、径 0.3 ～ 0.5 cm、一端はややとがり、他端はやや丸みを帯びる。外面は淡黄色～淡黄褐色で、大小の縦じわがある。折るとき皮層は柔軟であるがもろく、中心柱は強じんである。皮層の折面は淡黄褐色を呈し、やや半透明で粘着性がある。

本品はわずかににおいがあり、味はわずかに甘く、粘着性である。

本品の横切片を鏡検するとき、表皮に内接して四～五層の褐色の細胞からなる根被が認められ、その内側に一層の外皮、さらにその内側には柔細胞からなる皮層がある。内皮は明瞭で、放射中心柱には約 20 個の原生木部がある。皮層柔組織中にはシュウ酸カルシウムの柱状晶及び束針晶が含まれ、外皮には油滴が認められる。

純度試験 細根部 本品は細根部 1.0 % 以上を含まない。

灰分 3.0 % 以下。

乾燥破傷風ウマ抗毒素

Freeze-dried Tetanus Antitoxin, Equine

乾燥破傷風抗毒素

本品は用時溶解して用いる注射剤で、ウマ免疫グロブリン中の破傷風抗毒素を含む。

本品は生物学的製剤基準の乾燥破傷風ウマ抗毒素の条に適合する。

性状 本品は溶剤を加えるとき、無色～淡黄褐色の澄明又は